

実践型アートマネジメント・人材育成プログラム「藍の學校」成果展

藍より出づ

2025年藍の學校阿波篇

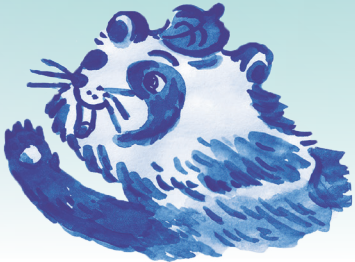
Ai
yori
izu

つながりことで自分が変わる。

あやふさはまねること。



Ai no gakko

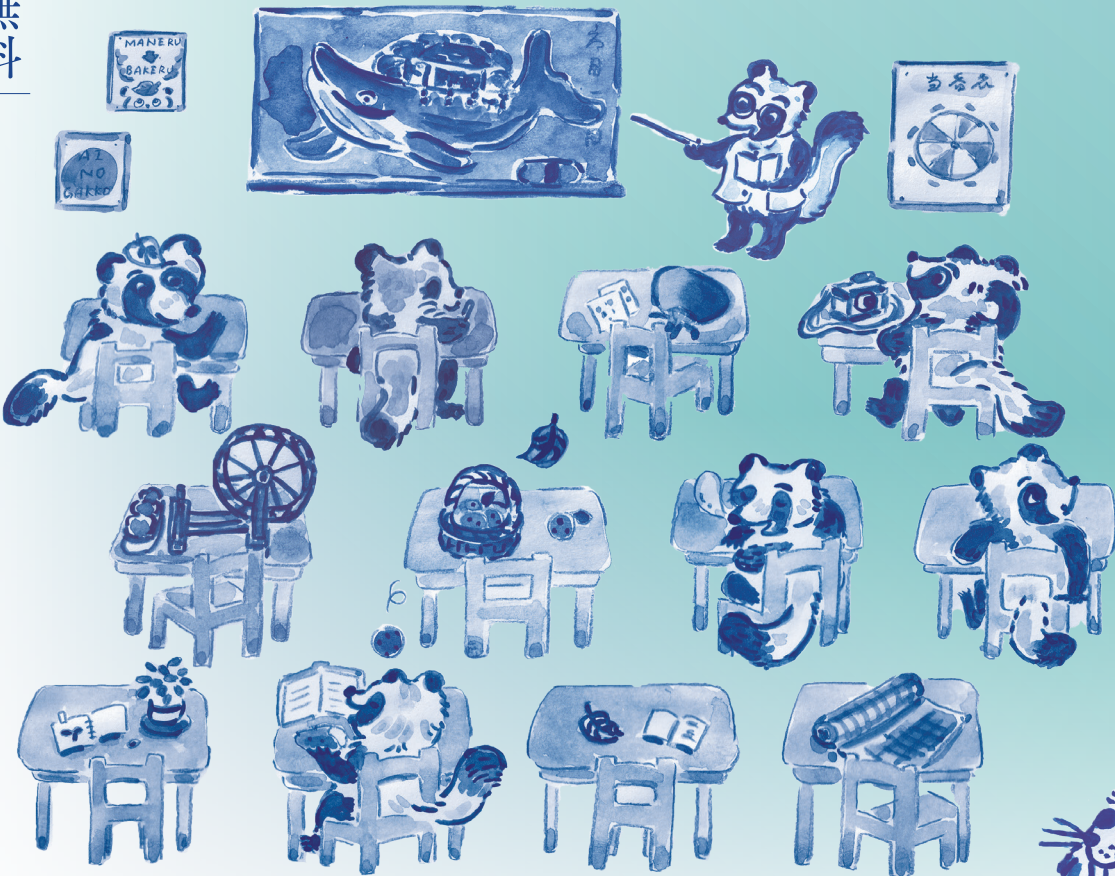


2026年1月19日(月)―31日(土)
開館時間：午前10時―午後5時(入場は閉館の20分前まで)
休館日：1月28日(水)―29日(木)
主催：学校法人瓜生山学園 京都芸術大学
企画：藍の學校

京都芸術大学 芸術館

人間館
ギャラリー・オーブ2階

入館無料



Illustrator: Kika Tsujimoto

監修 | 吉岡洋 (美学者・京都芸術大学教授)
会場構成 | 藤井良平 (デザイナー・京都芸術大学専任講師)
企画 | 藍の學校
主催 | 学校法人瓜生山学園 京都芸術大学

【実践プログラム講師】

安藤喬平 (四国自然科学センター 主任研究員)
石川文江 (楮布織作家)
出射優希 (ライター)
オオニシカナコ (染めもの作家)
河田憲政 (フォトグラファー)
片山達貴 (写真・映像記録)
金原祐樹 (徳島県立文書館前館長・近世史研究者)
玄番真紀子 (阿波太布伝統技法保存伝承会会長)
武知毅 (藍すくも生産者・藍師)
田村美奈子 (染色家)
丹下紘希 (映像作家・葡萄農家・人間見習い 京都芸術大学教授)
中山博喜 (写真家・京都芸術大学教授)
中村功 (和紙職人・作家)
中村美千子 (和紙職人)
野村春花 (haru nomura主宰)
早川鉄兵 (切り絵作家)
舩井由美子 (公益社団法人 三木文庫 学芸員)
松由拓大 (藍百姓藍松代表)
吉原均 (元徳島県立農林水産 総合技術支援センター 上席研究員)
梅崎由起子 (藍染作家・京都芸術大学専任講師)

Map:



瓜生山キャンパス (京都)

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116
電話：075-791-9122 (代表)

Access:

市バスは全て「上終町・瓜生山学園 京都芸術大学前」下車

●JR「京都駅」より 市バス5系統／岩倉行 (約50分)

●地下鉄「北大路駅」(北大路バスターミナル)より

市バス204系統循環 銀閣寺方面 (約15分)
※地下鉄北大路駅へはJR京都駅より約15分

●京阪「出町柳駅」より

市バス上終町3系統／上終町・瓜生山学園
京都芸術大学前行 (約15分)
叡山電車 (京阪出町柳駅乗り換え)
「茶山・京都芸術大学駅」下車・徒歩約10分

●阪急「京都河原町駅」より

市バス5系統／岩倉行 (約30分)
市バス上終町3系統／上終町・瓜生山学園
京都芸術大学前行 (約30分)

※所要時間はあくまでも参考としての標準時間です。
天候や交通事情により変わりますのでご注意ください。



KYOTO UNIVERSITY OF THE ARTS

学校法人 瓜生山学園
京都芸術大学



Institute
Design
Kogei

令和7年度
大学における芸術家等育成事業



藍の學校
Project to learn Kougei through Indigo

本学では令和7年度大学における芸術家等育成事業「受け継ぐ、伝える、伝統文化を未来へ生かす実践型アートマネジメント・人材育成プログラム-藍の学校-」に取り組みました。令和7年度のテーマ「産地と作家」では、阿波藍の産地、徳島を舞台にフィールドワークを開催しました。阿波藍、拝宮和紙の職人・藍染作家、切り絵作家、楮布織作家、写真家、記録映像など第一線で活躍する講師の指導のもと、藍の世界を写真や映像で伝えるドキュメンタリー作品や、和紙と藍と切り絵の融合によってできた作品を轟農村舞台に展示したインスタレーション作品を制作しました。藍四十八色の再現にも挑戦し、見事に染め上がった布は、藍の植物としての可能性が広がり、色の美しさに触れるきっかけとなりました。藍を種から蒔き、育成をする「藍を愛でる」では、藍を育て、それぞれが研究したことをまとめた壁新聞や、育成した藍の葉で染めた美しい布を展示します。



令和6年度藍の学校成果展（撮影：大造兄弟）

会期中のプログラム

ギャラリートツアー

Program 01

藍の学校の講師・受講生によるギャラリートツアーを開催します。時間になりましたら、展覧会場にお集まりください。

① 2026年1月23日（金） 14:00－

② 2026年1月25日（日） 11:00－

参加無料・現地集合

所要時間：1時間程度

切り絵ワークショップ

Program 02

デザイン：切り絵作家 早川鉄兵

Study room 3 でフィールドワークをした徳島県の木頭の森をテーマに、藍染した拝宮和紙を使用した切り絵を作ります。

2026年1月25日（日） 10:00－12:00

定員：各回15名・要申込（先着順）／参加無料

所要時間：1時間30分程度

場所：京都芸術大学内教室

当日は9:45に展覧会場にお集まりください。

ワークショップ会場に移動します。



お問い合わせ：
学校法人瓜生山学園 京都芸術大学 藍の学校lab.
Mail info@ainogakko.jp
HP https://ai-no-gakko.kyoto-art.ac.jp/



受け継ぐ、伝える、伝統文化を未来へ生かす。新しさは、受け継ぐことを通じて生まれてくる。

Program 03

対面講演会 TSUNAGU.US #2

会場：京都芸術大学 智勇館／定員：各日程先着100名・要申込／参加無料

2026年1月24日（土）
「JAPANBLUE ー原点ー」

対談 | 13:00－14:15
「写真との出会い 横須賀からひろしまへ」

独学で始めた写真は撮影よりも暗室作業に興味をもつ。暗室の暗がりから生まれる写真はとても新鮮な体験であった。そして写真の使命である記録と伝達から遠く離れた写真をめざす。横須賀から出発した写真は自然の流れとして「ひろしま」へ私写真と戦後史がリンクしながら新しい関係が見えてくる。

石内 都 ISHUCHI Miyako
写真家
桐生市生まれ。横須賀市育ち。2005年、母親の遺品を撮影し「Mother's」で第51回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表。2007年より被爆者の遺品を撮影した「ひろしま」を発表。現在も継続中。2014年、写真界のノーベル賞と呼ばれるハッセルブラッド国際写真賞を受賞。2024年 Woman in Motion Photography Award（フランス・アルル）受賞。

登壇者

聞き手

吉岡 洋 YOSHIOKA Hiroshi ／美学者・京都芸術大学教授

講演 | 14:30－15:45 「ジャパンプルー」

「ジャパンプルー」という言葉が最初に使われ出したのは日本の浮世絵からといわれています。日本では空や水の自然を表現する際に青のボカシ、つまりグラデーションが多用されています。山、森、川に囲まれた日本は湿度の高い国で、霧がたちグラデーションの景色に満ちています。気づくところのグラデーションによる表現は日本独特であると感じます。私は、このつかみどころのない日本的な空間を藍で表現することがベストであると思っています。

福本潮子 FUKUMOTO Shihoko
藍美術家
大学で西洋画を学び、「具体グループ」や「もの派」の作家達とも交流を持ちつつ、理想的な「空間表現」を求めて、油絵具から、焼き付け塗装、ホーローと制作手段を変えた。ニューギニア探査で民族美術に出会い、自身のアイデンティティを問うようになり、日本の伝統を学びたいと二代目龍村平蔵のもとで仕事をし、藍に出会う。独学で藍染に没頭し、作品を作り続ける。藍に出会ってから水をえた魚のように制作を続けてきた。日本の藍は濃淡の幅が広く透明感があり精神性までも表現できると思います。

登壇者

司会

酒井稚恵 SAKAI Chie ／テキスタイルアーティスト・京都芸術大学講師

鼎談 | 16:00－17:00
「石内 都・福本潮子・吉岡 洋による鼎談」

◀1月24日（土）申し込みフォーム
https://forms.gle/LAWpyfPAVK7SBYJQ9

2026年1月25日（日）
「JAPANBLUE ー藍の世界ー」

講演 1 | 14:00－15:10 「藍染の歴史」

藍草を用いて染める藍染の技術は中国、インド、ペルシャ、エジプトなど古くから文明の栄えた地で完成したと言われています。やがて日本にも伝わり、正倉院宝物には「開眼纈」「縹地大唐花文錦」など藍染と思われる染織品が多く遺されています。絹に染める繊細な藍染、木綿や麻など植物繊維に染める藍染、様々な染織品が日本にはありますが、時代を超えて愛された藍染について歴史を追いながら、紐解いていきたいと思います。

染司よしおか
吉岡更紗 YOSHIOKA Sarasa
染織家・染司よしおか六代目
アパレルデザイン会社勤務を経て、愛媛県西予市野村町シルク博物館にて染織を学ぶ。2008年より生家である「染司よしおか」で制作を行っている。2019年染司よしおかの六代目当主となる。染司よしおかは、京都で江戸時代より200年以上続く染屋で、古法に倣い、すべて自然界に存在する染料で染色をする染織工房。東大寺修二会など古社寺の行事に関わりながら、空港、ホテルなどに作品を納める。著書『染司よしおかに学ぶはじめての植物染め』

登壇者

講演 2 | 15:30－16:40
「もっとも古いものが、もっとも新しいものになる ー 工藝×デザインの方法論」

伝統的な知恵と技術がつまった本藍染の魅力を、現代のデザインにどう活かすべきか？またどのように伝えていけばいいのか？その考え方の核となる大切なポイントと、実際のデザインへの展開を、matohuによる工藝×デザインのドキュメンタリー作品＝「手のひらの旅」の実例や映像を交えながら、多角的にお話します。これからのものづくりのヒントになるはずです。

matohu まとう
堀畑裕之 HORIHATA Hiroyuki
関口真希子 SEKIGUCHI Makiko
デザイナー
「日本の美意識が通底する新しい服の創造」をコンセプトに2005年に設立。以後東京コレクションに参加し、日本の歴史やコンセプト、伝統工芸などを駆使した作品を発表。現代日本のファッションデザインを代表するブランドとしてプレスや海外のメディアから、高い評価を受けている。またスパイラルや金沢21世紀美術館や熊本現代美術館などでの展覧会も多数行っている。毎日ファッション大賞新人賞・資生堂奨励賞、織研賞を受賞。

登壇者

鼎談 | 17:00－18:00
「染司よしおか 吉岡 更紗・matohu 堀畑 裕之＋関口 真希子・吉岡 洋による鼎談」

◀1月25日（日）申し込みフォーム
https://forms.gle/evVTof2NGi5PC9s16